



『私の思い出の一冊』

伝記「ヘレン・ケラー」
砂田 弘／文 ポプラ社

白浜町立白浜第二小学校
校長 山田 理恵

小学校の頃は、家にあった本や図書室の本をよく読んでいました。特に覚えているのは、推理小説やSF、伝記シリーズです。シャーロック・ホームズの明快な推理やSFのありえないような不思議な話、手に汗握るストーリーに思わずドキドキワクワクしながら次のページを開いていたことを思い出します。

一方、自分の考え方や人生観に影響を与えたり、希望を持たせてくれたりしたのが、伝記シリーズでした。今回はその中でも「ヘレン・ケラー」の伝記を紹介したいと思います。

ヘレン・ケラーは1880年にアメリカに生まれました。元気な赤ちゃんでしたが、1歳7ヶ月の時の病気が原因で、「見えない」「聞こえない」「話せない」という、三重苦を背負うこととなります。家族はヘレンをとっても大切にしますが、教育をすることができませんでした。

そんな中で、7歳の頃サリバン先生と出会います。サリバン先生と共に、様々な困難を乗り越えながら、一生懸命に文字を学び、言葉を学んでいきます。また、9歳からは、声

が出せるように大変な努力を積み重ねたそうです。

ヘレンはサリバン先生と共に勉強を続け、大学に行き学業を修めました。そして、自分の経験をたくさんの人々に話し、目の見えない人や障害を持つ人々の力になろうと生涯にわたって力を尽くしました。三度にわたって日本を訪れ、日本の福祉事業の推進にも力を尽くしたそうです。

「見える」「聞こえる」「話せる」ということが当たり前ではないということをお話を通して知り、またどんな境遇でも努力を続けることの大切さを教えてもらいました。

ヘレン・ケラーの言葉の中に「本は、私が見ることのできないおもしろいことをたくさん教えてくれます。くりかえし、くりかえし、私が知りたいことを教えてくれるのです。」とあります。その言葉の通り、本の楽しさや感動を子どもたちにもたくさん味わってほしいと思います。また、大人になってから伝記を読むのも学びが大きいと感じます。いろいろな年代で読んでみるのもおすすめです。

学校図書館司書おすすめの1冊

『本を読む女』 林 真理子／作 新潮社

学校図書館司書

鈴木 恵里佳

本を読むことを支えに、大正・昭和の時代を生きた万亀（まき）という少女の半生の物語。常に前向きに夢を持ち生きていく万亀。彼女の言葉がいくつも心に刺さりました。数多くある著者の作品の中でも特に好きな1冊です。本好きにとってはつい手に取ってしまう題名ではないでしょうか。万亀のモデルは著者自身のお母様だそうです。

